

平和の文化を育む

著：チャンドラ・セティアワン¹

I. はじめに

インドネシアはその誕生以来、普遍的価値と親密な関係にある。実際、インドネシアを建国した人々は多種多様なバックグラウンドを持っていたが、彼らはインドネシアという国家を設計し構想する中で、その多様性により強化されていった。つまりインドネシアは建国当初から、同じ夢を目指しつつ多様性を保ちながら平和的に共存するという基本的合意の上に成り立っているのである。この原則はインドネシアのスローガン「Bhinneka Tunggal Ika（多様性の中の統一）」に強く反映されている。インドネシア人のほとんどがイスラム教徒であるにもかかわらず、インドネシアはイスラム国家ではない。インドネシアはパンチャシラの第 1 原則によって、信教の自由を市民に保障すると同時に宗教の価値を心から賛美する。（この言葉は、インドネシア共和国副大統領で経済学者のブディオノ氏が、ジャカルタで開催されたグローバル・ピース・リーダーシップ会議の基調講演で 2010 年 10 月 16 日に述べたものである。）現在インドネシアには宗教省があり、イスラム教、プロテスタント、カトリック、ヒンズー教、仏教、儒教という 6 大宗教を扱っている。かつてスハルト時代には、スハルト体制によって儒教が排斥されていた。信仰に関連するインドネシアの非政府組織（NGO）の 1 つにナフダトゥル・ウラマー（NU）がある。NU はインドネシア最大のイスラム組織であり、寛容を推進し、インドネシアのイデオロギーとしてパンチャシラを受け入れているため、インドネシア国内で重要な役割を果たしている。インドネシアのジャカルタで開かれる GPF アジア太平洋を共催するメインパートナーを探していたグローバル・ピース・フェスティバル財団（GPIFF）が NU を選んだのは、そのためである。人種、国籍、

¹ グローバル・ピース・フェスティバル・インドネシア財団（GPIF）理事長、インドネシア儒教最高会議幹部会コーディネーター。

宗教、文化を問わず全人類は神の下で 1 つの家族である（「ワン・ファミリー・アンダー・ゴッド」）という GPF かのビジョソは、インドネシアに持ち込まれるや、インドネシアの主たる多宗教間組織に受け入れられた。GPF かの活動を導く柱の 1 つは、奉仕の文化を構築することである。この理念を広めるために、グローバル・ピース・フェスティバル・インドネシア財団（GPIF）は一連のグローバル・ピース・ボランティア・キャンプを開催し、様々な信仰を持つ若者が参加した。

II. インドネシア儒教小史

儒教がインドネシアに伝わったのは、はるか昔のことである。儒教の寺院としては、北スラウェシ州マナドに 1819 年に建立された萬興宮がある。ほかにも、1916 年にスラバヤで復興された文廟という儒教の寺院がある。20 世紀初頭には儒教の組織が既に設立されていた。この組織の最初の会議は 1923 年 4 月 12 日にジョグジャカルタ（ジャワ島中部）で開かれた。最終的に、1955 年 4 月 16 日にサラ（ジャワ島中部）で開催された会議で組織名が MATAKIN（Majelis Tinggi Agama Khonghucu Indonesia、インドネシア儒教最高会議）と改称され、この名称が現在まで使用されている。

第二次大戦後の 1945 年 8 月 17 日、インドネシア独立の闘士のリーダーたちは遂に独立宣言の時を迎えた。そのちょうど 1 日後に 1945 年憲法と呼ばれる憲法が採択された。この憲法の信教の自由に関する条項については、下記の該当するパラグラフでさらに詳しく説明する。

インドネシアの基本憲法である 1945 年憲法の第 29 条第 2 項は、国は信教の自由を保障すると規定する。従って、イスラム教徒がインドネシア人口の多数派（88%）を占めているにもかかわらず、イスラム教はインドネシアの国教ではないのである。インドネシアは神権政治の国ではないため国教が無い。パンチャシラが国家のイデオロギーである。インドネシア国民はパンチャシラを国家のコンセンサスとして受け入れており、

すべての宗教団体がインドネシアの将来について集まって話し合うための共通のプラットフォームとして認めている。パンチャシラには 5 つの原則がある。すなわち、全能の唯一神への信仰、人道主義、インドネシアの統一、内なる知恵に導かれた民主主義、すべての人々に対する社会正義の 5 つである。さらに、法令第 1 号/PNPS/1965 という宗教関連の別の法律もあり、現在も有効である。この法律の注釈には、インドネシア国民が受容する 6 つの宗教として、イスラム教、プロテスタント、カトリック、ヒンズー教、仏教、儒教が挙げられている。さらに同法の注釈では、上記の 6 つの宗教以外がインドネシアで認められないというわけではなく、それらの宗教もインドネシア国内で存在する権利を有するとされている。

1967 年、スカルノ氏に代わってスハルト将軍がインドネシア共和国大統領となり、その後 31 年間に渡って在任することとなる。スハルトとその体制は、理由には議論の余地が非常に大きいものの、反中国政策を実施した。スハルト氏は大統領に就任すると直ちに 1967 年大統領令第 14 号を公布した。これは、中国文化の習慣、中国の伝統的信仰の表現、中国の儀式や祭り、すなわち中国に関連するすべての事を事実上禁止するものであった。儒教がインドネシアにおける中国的信仰であることは明らかであり、この大統領令はインドネシアの儒教に確実に大打撃を与えた。その後、この大統領令の方針に沿った規制が政府機関によって次から次へと実施された。私はインドネシア国民でありながら他とは異なる扱いを受け、特に市民権に関してインドネシア政府から差別的扱いを受けた。例えば、スハルト時代には儒教信者のカップルは婚姻届の受付を戸籍登録事務所で拒否された。また、儒教信者は他の国民のように ID カードに自分の信仰を記入できなかった。儒教団体は公共の建物で会議を開くことを拒否された。儒教信者には公共の場所で集会を開く許可が下りなかった。

私自身は 1977 年から地元で儒教団体に参加している。また、1993～1998 年と 1998～2002 年にはインドネシア儒教最高会議議長に指名された。私たちは市民権を獲得するために、平和的な方法で、非暴力的な運動により、政府と闘うことを選択した。全能の

唯一神である「天」を信仰し信頼することは、天命を確立・実行し、人道という輝かしい徳を体現し、仁・義・礼・智の中で生きることであると、私たちは信じているのだ。明るい未来に向かって発展を支えることのできる質の高い人間、完成された人間、あらゆる資質を備えた人間の育成を実現するために、儒教は次のように教える。人間は自分の力で心を育むべきである。神は本能を超えた存在として人間を作ったのであり、自ら学び、自ら心を育まねばならないということを自覚し理解すべきである。「孔子曰わく、命を知らざれば、以て君子たること無きなり」（論語・堯曰第二十 5）。徳の実践を学ぶことは、全能の唯一神である天に魂を捧げることの一環として命の続く限り行うべきことであり、これが、世俗の生活で困難や試練に打ち勝つべく成長せんとする人間の道徳的力の源泉となる。儒者であるとは、自分自身が人間として、内的自己において徳の潜在的可能性を保持し、大切にし、絶やすことなく育む責任を負うということを示すことである。愛すなわち仁、義、礼、知識すなわち智は、何も無い所から私たちの中に注ぎ込まれるのではない。これらの徳は私たちに既に備わっているのである。

私は議長を務めている間、宗教間の協力の重要性を実感した。インドネシアの少数派である儒教コミュニティは、独力ではインドネシア国民としての権利回復のために闘うことができないと感じたのである。また儒教の教えにも、「四海の内は皆兄弟たり」（論語・顔淵第十二 5）とある。そこで私たちは、イスラム教の指導者にアプローチすることにした。彼らは、差別と人権のために闘う私たちへの支援を喜んで表明してくれた。私は、後にインドネシア共和国大統領になったアブドゥルラフマン・ワヒド氏（グス・ドゥール）などナフダトゥル・ウラマー²の指導者や、イスラム学者シャフィ・マーリフ博士などムハマディヤ³の指導者、さらにはヌルホリス・マジッド博士、ジョハン・エフェンデイ博士といった複数の高名なイスラム学者に、スハルト体制に対する私たちの戦いを支援してくれるよう要請した。これらの行動に加えて、2000年にインドネシ

² ナフダトゥル・ウラマーは、インドネシア最大、おそらく世界でも最大のイスラム教組織で、会員数は5000万人を超えると推測されている。

³ ムハマディヤはインドネシアで2番目に大きなイスラム教組織。

ア宗教者平和会議（ICRP）の共同設立者となるなど、宗教間団体での活動も積極的に行った。

アブドゥルラフマン・ワヒド氏（グス・ドゥール）は 1998 年のスハルト政権崩壊を受けてインドネシア共和国大統領選挙に出馬し、1999 年に大統領に就任した。彼の就任期間は短かったが、その中でも特筆すべきことは、1967 年大統領令第 14 号の廃止である。彼はこれによって、インドネシアの華僑と儒教信者を差別しないというメッセージを発した。インドネシア儒教最高会議（MATAKIN）はたちまち復活し、存在感を完全に取り戻して、比較的早いうちに他の 5 つの「仲間」と同等の立場に立つことができた。しかし、儒教信者のカップルの戸籍登録、ID カードへの儒教の記載、宗教教育といった市民権は、アブドゥルラフマン・ワヒド氏の在任中にはまだ回復できなかった。

私は幸運なことに、2002～2007 年にインドネシア人権委員会の委員に選出された。この地位があれば、儒教がインドネシアで他の 5 つの宗教（イスラム教、プロテスタント、カトリック、ヒンズー教、仏教）と同等の地位を回復するプロセスを加速させるために重要な役割を担うことができる。2006 年、インドネシアの儒教信者は信教の自由を享受することができ、政府はインドネシアの他の宗教コミュニティと同等に儒教を扱った。これが実現したのは、儒教指導者の粘り強い不屈の精神と、イスラム教の友人たち、すなわちナフダトゥル・ウラマー（NU）やムハマディヤの指導者、イスラム学者、宗教間 NGO、インドネシア人権委員会が、政府に対する圧力団体として支援してくれたことによる。現在、宗教省のオフィスには儒教コミュニティを扱う特別の部署が設けられ、毎年、儒教コミュニティの発展のために国家予算が割り当てられている。

II. 「Bhinneka Tunggal Ika」（多様性の中の統一）

インドネシアの歴史を見てみると、すべての世界宗教がインドネシアに初めて伝来したときに平和的に浸透している。イスラム教はイスラム商人とスーフィー教団が、キリスト教は宣教師が、ヒンズー教はインドから来たヒンズー教徒の移民が、仏教と儒教は中国とシンガポールから移民してきた中国人の信者たちが伝えた。こうして平和的に浸透したことで、世界宗教同士の交流や、世界宗教と多くの国の土着宗教との相互交流の雰囲気を作り出されている。この雰囲気をさらに強めているのが、土着の文化がもたらす土着の知恵である。この知恵も、異なる宗教グループ間の調和と協力を推進する傾向を持つ。一部のスポーツで宗教間の調和が乱されるようになったのは、ごく最近、ここ10年間のことである。

インドネシア共和国の国章「ガルーダ・パンチャシラ」には「**BHINNEKA TUNGGAL IKA**」という文字が飾られている。これを訳すと、「多様性の中の統一」、すなわち「私たちは多くの種類の人間からなるが、私たちは1つだ」という意味になる。このスローガンは近代国家としてのインドネシア建国の精神であり、人種、地域、社会、宗教の違いを問わない国民の本質的統一を宣言したものである。「**Bhinneka Tunggal Ika**」はインドネシア国家の公式スローガンである。これは古ジャワ語で、おおまかに「多様性の中の統一」と訳されることが多いが、厳密には「バラバラ（だが）、それでも1つ」という意味である。この言葉はインドネシアの国章「ガルーダ・パンチャシラ」にも示され（神鳥ガルーダの爪に握られた巻物に書かれている）、インドネシア憲法第36A条でも特に言及されている。「**BHINNEKA TUNGGAL IKA**」という概念は、インドネシア史では新しいものではなく、仏教寺院ボロブドゥールが建立された時代にまで遡ることができる。これは8～9世紀、シャイレンドラ朝がジャワ島中央部の平原を支配していた頃である。それから200年後には、ジャワ島東部のブランタス溪谷で、アイルランガ王が同じ原則に基づいた統一王国を築いている。

オバマ大統領は、2010年11月9～10日という短いインドネシア訪問の際に、インドネシア大学で大変興味深い発言をした。以下に引用しよう。

「しかし、私が少年時代を過ごしたこの国がいかに多くの点で変わろうとも、私がインドネシアを愛するようになった理由—この国の憲法にも書かれ、この国のモスクや教会や寺院に象徴され、この国の国民が体現する寛容の精神—は、*Bhinneka Tunggal Ika*、すなわち多様性の中の統一の上に今も成り立っています。これがあるからこそインドネシアは世界の模範となれるのであり、だからこそインドネシアは 21 世紀にこのような重要な役割を果たすことになるのです。」

インドネシアは、約 1 万 3000 の島と何百ものエスニックグループから構成されているため、生き残りたいなら協力しなければならない。自分たちだけではすべてのニーズを満たせないため、協力やパートナーシップが必要となる。インドネシア諸島では少なくとも 2000 年前から貿易が栄えていた。ここ何世紀もの間、最も重要な貿易相手国はインドである。プランバナン遺跡のヒンズー教寺院やボロブドゥール遺跡の仏教寺院など、歴史的証拠には事欠かない。マレー語も経済活動によってインドネシア諸島全体に広まった。マレー語は非常にシンプルなため、簡単に覚えられるのである。後にマレー語はインドネシア諸島の共通語となる。それ以降も多くの文化から多大な影響を受け、現在ではインドネシアとマレーシアの公用語となっている。

現在のインドネシア国民は民主主義を享受している。県レベルだけでなく国レベルでも自由選挙が行われる。現在のインドネシアでは、大統領、知事、市長が直接選挙で選ばれている。しかし代償は大きい。多くの地域で、地方選挙によって現地の指導者の支持者間で対立に拍車がかかっている。候補者が選挙で負けるたびに、不正があったと言って対立候補が非難する。その結果、敵意が増幅される。対立が裁判で解決することもあるが、暴力に発展することもある。今日では、他人の意見や考え方に対する不寛容が強まっている。他人の意見や考え方を一向に尊重しようとせず、自分の意思や意見を他人に押し付けようとする人々がいる。彼らは、自分の意見や考え方が唯一の真理だと考えているのだ。普通、このような立場をとるのは宗教団体だけだと私たちは考えている。しかし、実際は必ずしもそうではない。現在では、自分たちの非宗教的な物の見方を誰にでも押し付ける世俗の集団があるのだ。彼らは、他人は自分たちの意見を尊重すべき

だが、自分は宗教団体の意見を尊重しないと張り。ところが、そもそも民主化のプロセスというものは、圧政からの自由として、さらには、いかに意見を尊重し違いを受け入れるかというプロセスとしてのみ理解できるものである。社会の中で保守主義が強まると、多様性、とりわけ宗教と信条の多様性を保った統一への団結が脅威に晒される懸念が高まる。スハルト体制の崩壊後に出現した急進派は、異なる意見を持つ他のグループを圧迫し始めている。宗教と信条を理由とした不寛容、差別、暴力の風潮が高まり続ける傾向にある。

最近、インドネシア共和国大統領スシロ・バンバン・ユドヨノ氏は、すべてのイスラム教徒に対し、国家と国民の4つの柱を遵守するよう呼び掛けた。4つの柱とは、国家の統一性、すべての宗教を同等の地位に置く国家イデオロギー「パンチャシラ」、宗教と祭祀の自由を保障する1945年憲法、国家のスローガン「Bhinneka Tunggal Ika」（多様性の中の統一）である。多様性の中の統一という精神を実践するために、インドネシア政府は宗教調和フォーラム（Forum Kerukunan Umat Beragama）の設立を推進している。このフォーラムは、33の州すべてと、約450の県と市のうち399カ所に設置されている⁴。その役割は、地域の宗教指導者を支援し、インドネシアにおける宗教間の調和の維持と宗教団体間の協力の推進を後押しするとともに、宗教団体同士の対話の機会を提供することである。これらのフォーラムのメンバーは、既存のすべての宗教団体の代表者から構成される。さらに、これらのフォーラムは、地域社会が設立し地方政府が支援する。宗教団体間の関係に関する数多くの問題がこれらのフォーラムによって処理され、解決されている。

III. ワン・ファミリー・アンダー・ゴッド（One Family Under God : 神の下の1つの家族）という価値観

⁴ Mudzhar, M.A. (2011). *Islamic in a Globalized World*. Jakarta: The Center for Research and Development of Religious Life, pp.74-76

パンチャシラの第 1 原則は全能の唯一神への信仰であり、これはインドネシア人の生き方、インドネシアの国家イデオロギーとなっている。そのため、グローバル・ピース・フェスティバル財団のビジョンである「ワン・ファミリー・アンダー・ゴッド」は、人種、宗教、部族、エスニシティを問わずインドネシア国民に受け入れられている。私たちは「ワン・ファミリー・アンダー・ゴッド」というビジョンの下、1) 宗教間パートナーシップの構築、2) 家族の強化、3) 奉仕を通じた「心の文化」の推進という複数の主要分野で行動指向のイニシアチブを実施することにより、宗教間パートナーシップを発展させてきた。インドネシアの様々な宗教指導者の中には、インドネシアのジャカルタで行われたグローバル・ピース・フェスティバル・アジア太平洋 2010 を積極的に支持する指導者もいる。カトリック神父でインドネシア司教協議会（Indonesian Conference of Bishops）事務総長のアントニウス・ベニー・スセトゥヨ神父、インドネシア・プロテスタント教会コミュニオン（Communion of Protestant Churches Indonesia）会長の A. A. イェワンゴエ博士、NU 総裁のサイド・アキル・シラジ博士、インドネシア・ヒンズー教組織（Indonesian Hindu Dharma Organization）総裁のイ・マデ・ゲデ・イラタ博士、インドネシア儒教最高会議議長のウェンシ・ブディ・サントソ・タヌウィボウォ氏など、インドネシア宗教界の全国組織の各代表者に独自にインタビューしたところ、グローバル・ピース・フェスティバル・アジア太平洋 2010 を支持するという意見で一致した。その理由は、宗教間協力の推進、婚姻と家族の強化といったビジョンとミッションを GPF が持つこと、奉仕の文化の構築によってインドネシアの様々な宗教団体からなる宗教間コミュニティが発展すること、平和構築、芸術や文化のパフォーマンス、医療、教育、家族の絆、環境問題といった分野での交流に若者を効果的に取り込むことができることである。

IV. NU とのパートナーシップによる GPF アジア太平洋

ナフダトゥル・ウラマー（NU）は会員数 5000 万～6000 万人を誇るインドネシア最大のイスラム教組織である。イスラム学校 1 万 8000 校を含む全国各地の社会機関と教育

機関の広大なネットワークを運営する。創立は 1926 年 1 月 31 日である。NU には以下のような 3 つの重要な柱、すなわち原則がある。1) **Tawasuth** (中道)。穏健な態度。正義の原則に基づき、あらゆる種類の極端なやり方を避ける。2) **Tasamuh** (寛容)。寛大な態度。異なる見解の尊重や、社会における社会文化的アイデンティティの多様性を保障する。3) **Tawazun** (均衡)。バランスのとれた態度。人間と全能の神 (アッラー) との間のみならず、同じ人間同士でも、調和のとれた関係を築くよう振る舞う。NU は頻繁に他の宗教団体や NGO と協力し、紛争地帯、特にイスラム世界の紛争当事者間の和解を提唱して、世界平和のための努力を支援する。総裁のサイド・アキル・シラジ博士は、世界の市民一人一人が世界平和への意識を心の中に植え付けるべきだと述べる。世界平和の実現は家族から始めなければならない。家族は、神に基づく神聖な価値を育むための重要な柱である。この価値によって、より美しく平和な世界を作るためにあらゆる多様なものを統一することが可能となる。従って、この進歩的なパラダイムと素晴らしい仕事をサポートすることが必要となり、それが私たちの責任となる。さらに、NU 副会長スラメット・エフェンディ・ユスフ氏は、全人類の間に平和を構築するためにグローバル・ピース・フェスティバル財団が進めるミッションは NU が考えるイスラム教と整合すると付け加える。グローバル・ピース・フェスティバルは、インドネシア社会と世界のすべての社会一般に平和と調和をもたらすためのグローバルな取り組みである。

NU と GPF が見同じ目標を目指していることから、私たちは NU をインドネシアでの主要パートナーに選んだ。私たちはまた、インドネシアの首都ジャカルタの知事、女性エンパワーメント・児童保護相、労働移住相、国家教育相、文化観光相といった多くの政府関係者とも協力している。さらに、インドネシア宗教者平和会議 (ICRP) といった NGO や、インドネシアの数多くの大学とも協力している。

V. グローバル・ピース・ボランティア (GPV) キャンプ

グローバル・ピース・ボランティア（GPV）は、人間活動のあらゆる分野や、人間社会の様々なグループを代表する若いリーダーによる、世界中の若者を主体としたネットワークである。彼らは同じ原則からなる共通の基盤に立ち、平和の原理に沿った和解の促進、障壁の克服、平和の構築という道を邁進している。このプログラムは、**奉仕とボランティアの文化を育む**ことを目的として、大学生が意見を交換し奉仕活動を通じて学ぶためのプラットフォームとなることを目指している。さらには、個性と価値観と徳を備えた若きリーダーを育成する機会にもなる。グローバル・ピース・ボランティア（GPV）キャンプは、相互理解と異文化間の協力を通じてキャンパス内に助け合いのコミュニティを作ることを目指している。

1. 2010年5月と7月に複数のGPVキャンプを開始した。これは2～3日間のセッションで、インドネシアの複数の都市でワークショップを実施するなどした。あるキャンプでは「共同扶助（collective help）の精神を育む」というトピックを取り上げた。そのほか、「若者が変化を生み出す」というテーマも取り上げられた。実際、他の多くの国々と同様にインドネシアでも、他者への奉仕の文化を心に根付かせた若い世代は大きな恩恵をもたらすはずである。
2. 2011年には、卒業生がグローバル・ピース・ボランティア・キャンプを実施した。キャンプの準備はすべて彼ら自身が行い、GPFIFは講演者と最低限のスタッフだけを提供した。
3. GPVキャンプを初めて高校生を対象に行う予定もある。GPVの卒業生が講演者と教育係となり、「神の下の1つの家族」「他者のために生きる」「真実の愛」というメッセージを広める。
4. 私たちの目標の1つは、さらに多くの地域的リーダーを育てること、バハサ（インドネシア語）を話せるようになることである。
5. 高校からの反応は非常に良い。

VI. 終わりに

儒者は君子（深遠な人間、紳士）となることをいつも夢見ている。君子とは愛の実践者である。グループや党派、徒党に縛られることなく、広い心と断固たる覚悟を持って愛を実践する人である。自分自身の内面に広がるこの愛が示すこと、それは、天（神）に忠誠を誓うことは他者を愛することだということである。他者を兄弟として信頼し、ゆえに宗教や信仰が異なっても互いに協力して、政府やあらゆる政党による人権蹂躪、差別、不寛容と暴力の拡大と戦わねばならない。特にインドネシアでは、教育、災害救助、貧困の改善、雇用の促進、環境問題、薬物中毒の防止のための革新的なプログラムを設計し、行動指向の宗教間パートナーシップの共通の基盤として家族的価値を促進する上で、宗教コミュニティ内での宗教間パートナーシップは重要である。人生を変えるような体験、特に宗教、エスニシティ、社会的地位という障壁を乗り越える友情、理解、調和的統一の架け橋となるような体験の中で、若者を教育し育てることが重要である。